

飯島十郎著

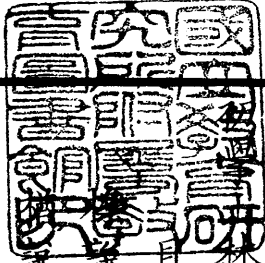
初學山林書

下

大日本教育會圖書印			
室	第	乙	70
八	三	670	
二冊	四號	三架	六國

函一第號

十卷三



林書卷下

目錄

橙說

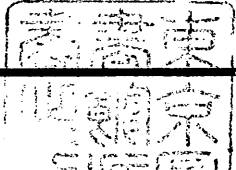
樹林說

薪說

炭說

炭窯說

燒炭說



薪炭收益説
薪炭雜説

初學山林書卷下目錄終

初學山林書卷下

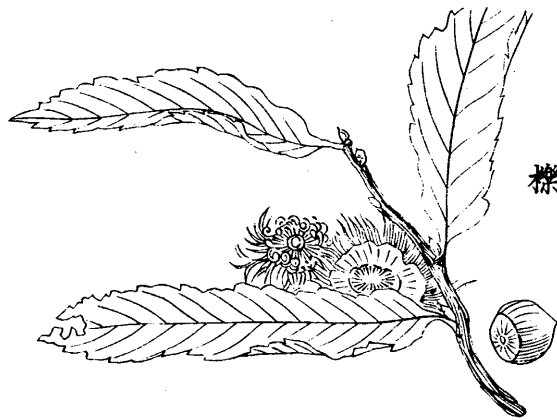
飯島半十郎 著
松野 礪 校

○標説

標ハ、訓ミテクヌギ、俗ニクニギト云ヒ、クノギト云フ、桐ト書シ、樞ト書シ、桐ト書ス、瀾葉樹ノ一ニシテ、民間専用燃料ノ第一等タリ、其ノ幹ハ、大ナルモノハ、高サ七八丈、圍ミ一丈余ニ至ル、樹皮厚クシテ、斂ヲナス、其ノ枝ハ、長大ニシテ、偃蓋ヲナシ、其ノ葉ハ、細鋸齒狀ニシテ、霜ニ遇ヒ凋落ス、夏

第十一圖

櫟



時花ヲ發ス、花ニ雌雄アリ、雄花ハ、至小ノ黄白花穗ヲナシテ垂ル、コト凡三寸、雌花ハ、穗短シ、秋季實ヲ結フ、實各苞アリテ、其ノ半ヲ包ム、コレヲ橡實ト云フ、其ノ材質ハ、白色ニシテ中心微紅ヲ帶フ、木理粗ナレトモ質硬クシテ量重シ、其ノ効

用ハ、薪炭トナシテ燃力最強シ、又子實ハ、皂色ノ染料トナリ、嫩葉ハ、野蠶ヲ養フベシ、又一種アベマキト稱フル者アリ、其ノ外皮ヲ剥キテ以テ木塞ヲ製スヘシ、総テ此ノ樹ハ、各地能ク樹テトモ、最喜ミテ暖地ニ生ス、畿内、東海、山陽、西海、南海ノ諸道ハ、皆適當ノ土タリ、

○櫟說

櫟ハ、訓ミテナラ、種類甚多シ、今其ノ中ニ就キ、二種ヲ舉ケテ以テ示サン、一ヲ大櫟ト云ヒ、一ヲ小櫟ト云フ、小櫟ハ、方言ソダメ又ホゾ

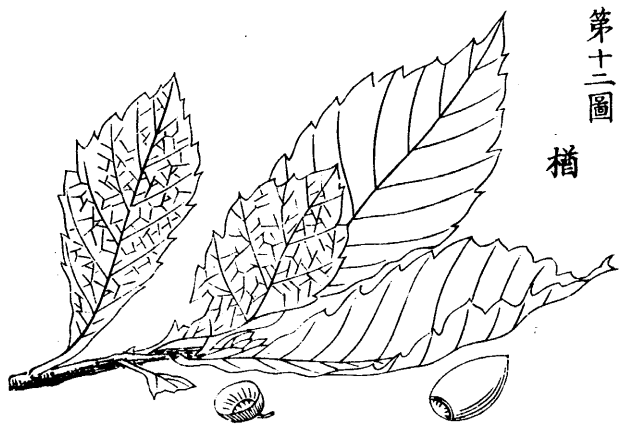
ホゾハ、古言ハ、ソノ約

ナラ 漢名ハ、枹、大枹ハ、方言ミヅナラ、又ナラ、俗ニ
枹ト書ス、漢名詳ナラス、

小枹ハ、濶葉樹ノ一ニシテ、民間専用ノ燃料タリ、
其ノ幹ハ、大ナルモノハ、高サ三四丈、圍ミ四五尺
ニ至ル、樹皮厚クシテ、麤ヲナス、其ノ枝ハ、稠密ニ
シテ、葉ハ、細鋸齒状ヲナシ、霜ニ遇ヒテ落ツ、夏時
雌雄二花ヲ發ス、其ノ色黄白ニシテ、狀櫟ニ似タ
リ、秋季實ヲ結ヒ、殼斗其ノ半ヲ包ム、其ノ材質ハ、
白色ニシテ、微黄ヲ帶ヒ、木理粗ナレトモ甚硬シ、
其ノ効用ハ、薪炭トナシテ、燃力櫟ニ劣ラス、其ノ

第十二圖

枹



萌蘗ハ、肥料トナリ、樹皮
ハ、染料トナリ、又山家ニ
於キテハ、此ノ材ヲ以テ
香蓆ヲ産センメ、又海濱
ニ於キテハ、此ノ枝ヲ束
ネテ、廉ソ采ダトナシ、海苔ヲ
採ル、此ノ樹ハ、我國大抵
樹タサル所ナシ、暖地ニ
宜シク、寒地ニ宜シク、又
平原曠野ニ宜シ、唯深山

ニハ樹タス、

大櫛モ亦濶葉樹ノ一ニシテ、其ノ幹ハ、高サ四五丈圍ミ一丈余ニ至ル、其ノ枝ハ、稠密ニシテ、葉ハ、細鋸齒状ヲナス、略小櫛ニ同シ、夏時花ヲ發ス、其ノ狀亦小櫛ニ同シ、秋季實熟ス、實亦小櫛ニ同シクシテ、稍大ナルノミ、其ノ材質ハ、淡褐色ニシテ、頗堅硬ナリ、木理ノ密ナルコト櫛及ヒ小櫛ニ優レリ、其ノ効用ハ、薪炭トナシテ、燃力櫛ニ讓ラス、又山家香蓆ヲ産セシムルハ、此ノ樹ヲ專トス、我國ニ於キテハ、櫛小櫛ト同シク建築器具ノ用ニ

供セスト雖、歐米諸國ニ於キテハ、專船艦ノ用ニ供シ、又諸器具ヲ製造スルコト、恰我國ノ杉、檜材ヲ用ルルカ如シ、此ノ樹多クハ深山ニ生シテ量甚重ク、運搬頗困シム、林ヲ樹テ、薪炭ヲ採収セント欲スル者ハ、宜シク小櫛ヲ樹ツベシ、

○榿説

榿ハ、訓ミテハリノキ、俗間訛リテハンノキト云ス、漢名ハ赤楊、濶葉樹ノ一ニシテ、其ノ種類甚多シ、亦民間必需ノ燃料タリ、其ノ幹ハ、高サ五六丈圍ミ四五尺ニ至ル、其ノ枝ハ、稠密ニシテ、葉ハ、細

第十三圖

橙



鋸齒状ヲナシ、霜ニ遇ヒテ落ツ、春季花ヲ發ス、花ニ雌雄アリ、其ノ色紫赤ニシテ、雌花ハ、短小、雄花ハ、下垂スルコト、恰紉線ノ如シ、實ハ黑褐色ニシテ、大サ雀卵ノ如ク、秋季熟シテ鱗拆ケ子落ツ、其ノ材質ハ白色ニシテ微赤ヲ帶ヒ、木理密ニシテ

硬シ、其ノ効用ハ、薪炭トナシテ、火力櫟、櫛ニ劣ルト雖、忽燃エ忽消ユルノ能アリ、内皮及ヒ實ハ、染料トナリ、又材ヲ燒キ灰ヲ製シ、火藥ノ用ニ供ス、歐、米諸國ニ於キテハ、此ノ材ヲ以テ諸器具ヲ製造ス、此ノ樹モ亦我國大抵樹タサル所ナシ、水畔ニ樹ツル最宜シトス、

○樹林說

収種、下種、移植、洗伐ノ諸法ハ、大抵上卷ニ詳ナリト雖、濶葉樹ノ林ヲ樹ツルニハ、其ノ法少シク異ナル所アリ、故ニ此ノ一説ヲ載セテ以テ

初學ニ示スコト、左ノ如シ、

凡櫟、檜、楡ノ林ヲ樹テ、薪炭ヲ採收セント欲ス
ルモノハ、先ツ運搬便利ノ地ヲトシ、道路ヲ修メ、
林界ヲ畫シ、三樹ノ中ニ就キ、其ノ土地氣候、地質、
位置ノ三
者ヲニ適當セルモノヲ擇ヒテ、コレヲ樹ツヘシ、
樹ツルノ法ハ、宜シク下種法ヲ行フヘシ、其ノ種
子ハ、皆一年ニシテ熟ス、秋季コレヲ收メ、櫟、檜ノ
種子ハ、坑ヲ鑿リ、坑底ニ撒布シ、土ヲ覆フコト、四
五寸ニシテ、藁薦ヲ以テ其ノ上ヲ覆ヒ、コレヲ貯
フヘシ、楡ノ種子ハ、杉、檜ノ種子ヲ貯フルト同シ

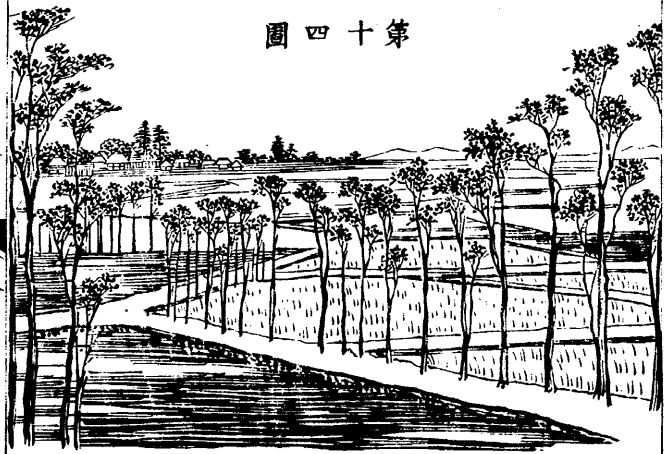
クシテ、可ナリ、而シテ明年春季コレヲ苗畦ニ下
スヘシ、苗畦ノ製ハ大抵上卷ニ詳ナリ、唯其ノ設
クヘキ所ハ、針葉樹ト異ナリ、必シモ林中ニ設ク
ルヲ要セス、向陽平坦ノ所ニシテ、土味佳ナレハ、
則佳ナリ、下種ノ法モ亦大抵上卷ニ詳ナリ、唯櫟、
檜ノ種子ハ、其ノ尖頭ヲ横ニシ、土ヲ封スルコト
深サ一二寸、風雨多キ地ハ、少シク深キヲ要スヘ
シ、楡ハ、米泔水ニ浸スコト二三日ニシテ下種シ、
土ヲ封スルコト深サ一寸ニ過クヘカラス、櫟、檜
ハ、大抵一月ニシテ發芽シ、寒地ニ於キテハ、或ハ

三四月ニシテ發芽スルコトアリ、椋ハ、半月ニシテ發芽ス、猪鹿、猿、兔及ヒ野鼠、野鷄ノ類ハ、喜ミテ標捕ノ種子ヲ食フ、宜シク其ノ害ヲ防クヘシ、蒺藜ノ後、屢雜草ヲ芟リ、其ノ明年三月假植ノ法ヲ行ヒ、上卷ニ其ノ明年三月移植スヘシ、或ハ假植法ヲ行ハスシテ、下種ノ明年三月直ニ移植スル者アリ、假畦ヲ設クルノ勞ナシ、最妙ナリトス、移植ノ法ハ、既ニ上卷ニ詳ナレトモ、三樹ノ苗ハ、針葉樹ト異ナリ、其ノ枝ヲ髡シ、其ノ根ヲ斷ツモ、敢テ妨ナシ、只命根ヲ損セサレハ、則可ナリ、又苗ヲ

濕薦ニ裹ミテ、坑中ニ置ケハ、數日ヲ經ルト雖、生意嘗衰ヘス、故ニ三樹ノ移植ハ、最簡易ノ業タリ、唯坑ヲ穿チ土ヲ封スルハ、宜シク針葉樹ヨリモ深カルヘシ、樹々ノ距離ハ、大抵四尺ヲ度トス、即一町歩ニ四千五百本ナリ、既ニ移植シテ、屢雜草ヲ芟リ、屢洗伐ヲ行ヒ、上卷ニ十年ノ後ニ至レハ、樹數大抵減シテ二千本トナリ、其ノ周圍七八寸ニ至ル、此ニ於キテ始メテ伐リテ薪炭トスヘシ、伐レハ則小蘗叢生ス、其ノ中生意最盛ナルモノ三四本ヲ殘シ、其ノ餘ヲ斷ルヘシ、五年ノ後ニ至

レハ、生長シテ周圍各七八寸ニ至ル、此ニ於キテ又コレヲ伐リ、小葉ヲ生セシメ、自後五年毎ニ伐ルコト、凡四五回ニシテ、生力全ク衰フレハ、則根ヲ掘リ、更ニ苗樹ヲ植ウヘシ、コレ樹林ノ大略ナリ、モシ夫レ山林ヲ有セサル者ハ、其ノ田圃邸宅ノ中ニ於キテ、苟閑地アラハ、即三樹ヲ樹テ、自家ノ燃料ニ供スヘシ、關東各地方ニ於キテハ、田畔橙ヲ植エ、以テ暴風ヲ防キ、以テ水災ヲ防キ、其ノ落葉ハ、飛散シテ自田圃ノ肥料トナリ、橙ノ虫シ、最肥料宜其ノ本幹ハ、喬杆トナリ、收稻ノ便ニ供シ、而

第四十圖



新山抄書

シテ後ニ薪炭トナス、實ニ至便ノ良法ト謂フヘシ、又東山道ノ一地方ニ於キテハ、草場三段ヲ以テ、耕田一段ノ肥料トナシ、而シテ其ノ草場中ニハ、松、杉、櫟、楮ノ類ヲ植ウ、是レ亦至便ノ良法ト謂フヘキナリ、美濃國惠那郡ニ於キテハ、繁草ノ種子ヲ採收シ、明年春季草場中ニ漫撒

シ、繁茂スレハ則芟リテ新芽ヲ生セシメ、コレヲ芟ルコト凡三回ニ至ル、故ニ草場狹シト雖、肥料ヲ得ルハ甚多キナリ、

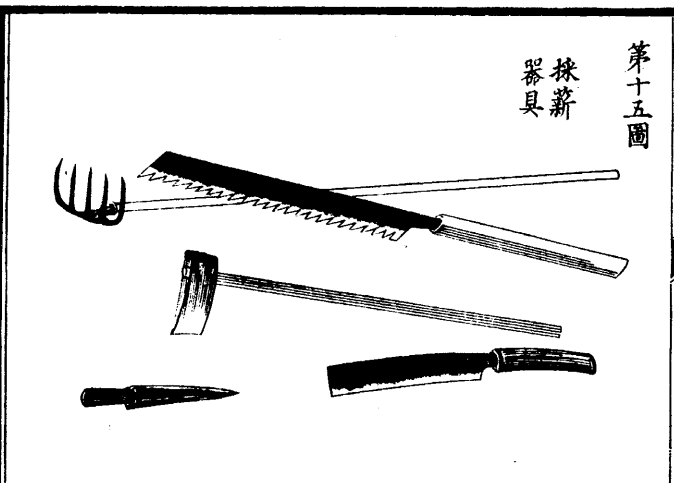
○薪説

薪材ハ、櫟ヲ上等トシ、楮ヲ中等トシ、椴ヲ下等トス、此ノ三樹ノ外、樺、椴、樺ノ如キ、最良ノ燃料アリト雖、是レ等ハ各地皆能ク生スルモノニアラサレハ、以テ民間普通ノ用料ニ供シ難シ、故ニ薪商ハ、コレヲ雜木ト称ヘ、三樹ニ劣レルモノトシ、其ノ價甚卑シ、唯松ハ、各地能ク生スルヲ以テ、三樹ト同シク普通ノ燃料タリ、蓋松ハ、其ノ燃力猛烈

ニシテ、二三ノ工場ニ於キテハ、實ニ欠クヘカラサル燃料トセリ、然レトモ其ノ臭烟ノ烈シキト、火力ノ久シキヲ保ツコト能ハサルトヲ以テ、其ノ價ハ、常ニ三樹ニ劣レリ、近時松薪欠乏シテ、其トモ例シ、故ニ薪材ヲ採リ、利益ヲ收メント欲スル者ハ、必三樹ヲ樹ツヘシ、凡薪材斫伐ノ期節ハ、八月ヨリ明年三四月ノ間ヲ可トス、其ノ法ハ、大抵上卷ニ載セタル松杉林ヲ伐ルト一ニシテ、先ツ地形ヲ察シ、區畫ヲ分チ、輪次ニユレヲ行フヘシ、唯松、杉、檜ト異ナリ、斫伐ノ後、小蘗ヲ生セシ

第十五圖

採薪器具



ムルヲ主トスレハ、深ク注意シ、根、土ヲ離ル、所ヨリ兩口法ヲ以テコレヲ伐ルヘシ、伐ルニ鋸子ヲ以テシ、務メラ根砧ヲシテ損セシムルコトナカレ、樵斧ヲ以テコレヲ伐ルモ、亦妨ナシト雖、根砧ヲ損シ易シ、根砧損スレハ、或ハ雨水ヲ引キ腐

爛ノ病ヲ来タシ、小葉叢生ノ妨ヲナスコトアリ、鋸子ヲ以テ伐ルノ全キニ如クコトナシ、採薪ヲ專業トスル者ハ、一日ニ周圍一尺ノ樹六七本ヲ伐ルヲ常トス、コレヲ株切又根切ト云フ、株切ヲナシ、而シテ寸尺ヲ定メ、或ハ一尺五寸、或ハ二三尺、小斧ヲ以テ枝條ヲ去リ、鋸子ヲ以テ本幹及ヒ巨枝ヲ斷リ、薪材トナス、モシ夫薪材ノ圍ミ大ナルモノハ鉄失及ヒ樵斧ヲ以テ、再ヒコレヲ劈斷シ、運搬ニ便ニス、專業者ハ、一日ニ能ク六尺立方ノ薪材ヲ斷ルヲ常トス、コレヲ玉切ト云フ、玉切ヲナシテ、運

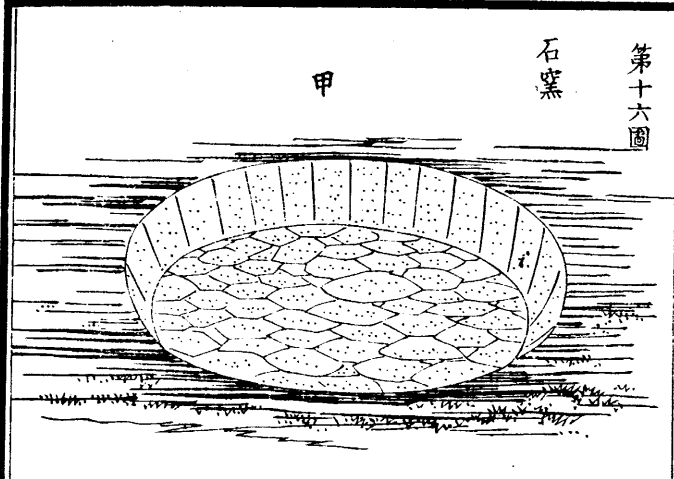
搬ノ便宜ヲ察シ、或ハ車ニ載セ、或ハ馬ニ負ハシメ、或ハ流ヲ下クシ、或ハ自擔ヒ、嘗設クル所ノ薪廠ニ運搬スヘシ、西説ニ薪材ハ林中向陽ノ地ニ積ミテ、コレヲ乾カシ、先ツ重量ヲ減セシメテ、後ニ運搬スヘシト云ヘリ、然レトモ運搬便利ノ地ハ、直ニ薪廠ニ運搬スルヲ可トス、薪材ヲ地上ニ積ムコト、久シケレハ、材皮黴癘ヲ生シ、燃力ヲ減スルナリ、宜シク注意スヘシ、

○炭説

凡林中所在ノ樹木ハ、皆燒キテ以テ炭ヲ製スベ

シ、唯其ノ製法及ヒ木質ノ異ナルニヨリテ、火力ノ強弱ト、熱度ヲ保ツノ長短トアリ、而シテ炭ヲ燒グニ數法アリ、其ノ通常ノ法ハ、石窯燒トシ、土窯燒トス、石窯ヲ以テ燒キタルモノ、コレヲ硬炭ト云フ、其ノ質硬キヲ以テ名ツク、土窯ヲ以テ燒キタルモノ、コレヲ土窯炭ト云フ、其ノ質脆シ、土窯炭ハ、火ノ燃ユルコト、最早キヲ以テ賞セラレ、硬炭ハ、熱度ヲ保ツコト、最長キヲ以テ賞セラレ、共ニ民間必需ノ燃料ニシテ、其ノ價ハ大抵差異アラス、土窯炭ノ上品ハ、櫛炭ニシテ、攝津ノ池田

石窯



下總ノ佐倉等ニ於キテ
 コレヲ製ス、故ニ池田炭
 佐倉炭ノ名アリ硬炭ノ
 上品ハ、櫛炭ニシテ備長
 ナル者、備後屋長始メテ
 コレヲ製ス、故ニ備長ノ
 名アリ、又紀伊ノ熊野ニ
 於キテ製ス、故ニ熊野炭
 ノ名アリ、而シテ其ノ他
 ノ炭ハ、炭商コレヲ雜炭

ト稱ヘ、下品トス、又松炭ノ如キハ、鍛工必需ノ燃
 料タリ、故ニ其ノ價貴シ、又厚朴炭ノ如キハ、漆匠
 及ヒ鏡工等以テ必需ノ用料トセリ、故ニ其ノ價
 亦貴シ、コレヲ要スルニ産出最多クシテ、利益最
 多キハ、經濟上ノ要領タリ、即三樹及ヒ松ノ炭ノ
 如キハ、利益最多クシテ、産出亦多キナリ、故ニ炭
 ヲ燒ク者ハ、宜シク三樹及ヒ松ヲ專トスヘシ、燒
 炭ノ季節ハ、仲秋ヨリ暮春ノ間トス、然レトモ冬
 時雪深キ地ハ、業ヲナシ難シ、我國大抵炭ヲ産セ
 サル所ナシ、然レトモ其ノ出額ハ、薪材ニ比スレ

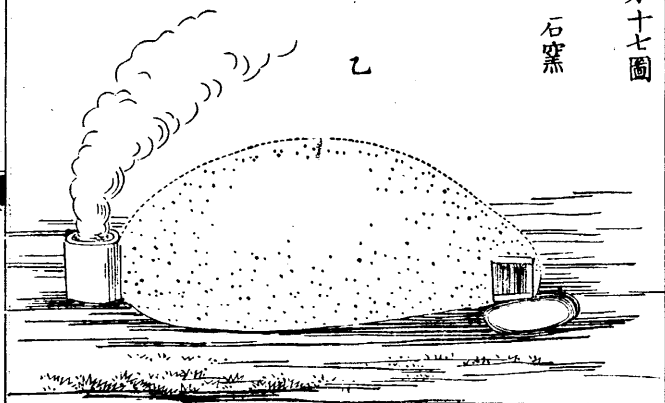
ハ、十分ノ一ニ過キサルナリ、

○炭窯説

石窯ノ製ハ各地同シカラス、今其ノ一法ヲ舉ケ
 テ、以テ示サン、先ツ運搬便利ノ地ニシテ、粘土、砂
 土及ヒ石材ノ在ル所ヲトシ、土ヲ穿チテ預窯状
 ヲ畫ス、其ノ状楕圓ニシテ縦凡六尺、横四尺深サ
 三尺、而シテ石ヲ窯底ニ鋪キ土砂粘土、砂土ヲ混
 和セシモノ、
 ヲ以テ其ノ間隙ヲ塗り、次キニ板石數鋪ヲ以テ、
 窯内四周ニ壁立セシメ、土砂ヲ以テ、其ノ間隙ヲ
 塗ルコト、第十六圖ノ如シ、次キニ烟筒ヲ作クル

第十七圖

石窯

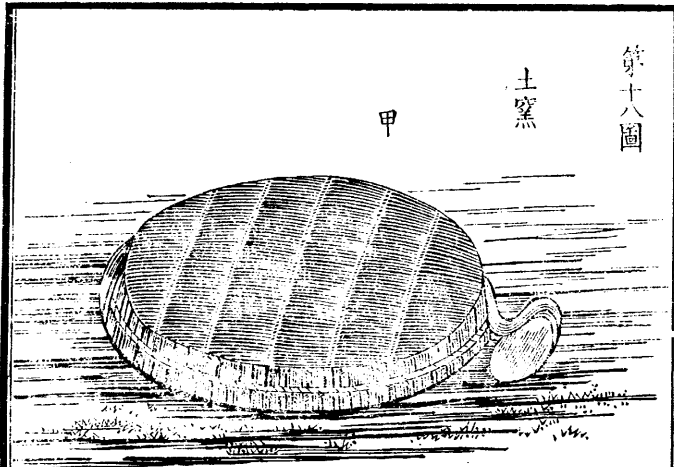


ナリ、筒ハ、石ヲ以テ製ス、
 其ノ大サ方八寸、高サ三
 尺、窯後ニ坐セシメ、窯内
 烟氣ノ噴出スル所トナ
 ス、次キニ窯口ヲ作クル
 ナリ、窯口亦石ヲ以テ製
 ス、縦二尺、横ハ上邊ニ於
 キテ一尺、下邊ニ於キテ
 一尺五寸トス、次キニ窯
 口ノ左右ニ石ヲ積ミテ、

石垣状ヲ作クルナリ、コレヲ雉子股ト云フ、而シテ窯上ニ架スルニ、方一尺長サ六尺余ノ石ヲ以テス、恰脊桁ヲ架スルカ如シ、次キニ平扁ノ石數鋪ヲ以テ左右ヨリ脊桁ニ横タヘ、土砂ヲ以テ其ノ間隙ヲ塗ルナリ、其ノ状恰屋脊ノ如シ、次キニ小石ヲ其ノ上ニ積ミ、土砂ヲ以テコレヲ塗ルコト、厚サ尺余、此ニ於キテ石窯全ク成ル、即第十七圖ノ如シ、モシ夫石材ニ乏シキ地ハ、材木ヲ以テ脊桁トナシ、左右ヨリ柴棍ヲ横タヘ、土砂ヲ以テ其ノ上ヲ塗ルモ、亦可ナリ、土窯ノ製モ亦石窯ト

同シク、各地皆異ナルナリ、今其ノ一法ヲ舉ケテ、以テ示サン、先ツ土ヲ穿チテ、預窯狀ヲ畫ス、其ノ狀、楕圓ニシテ縦七尺、横五六尺、深サ二尺、窯底漸次ニ後ニ至ルニ從ヒ、低下セシムルコト、凡六寸、次キニ長サ一尺五六寸ノ薪材、數百本ヲ窯内ニ倚立セシメ、藁索ヲ以テコレヲ結束スルコト、第十八圖ノ如シ、次キニ細柴ヲ其ノ上ニ積ミ、次キニ藁薦ヲ以テ、コレヲ覆ヒ、而シテ土砂ヲ窯ノ四周ニ入レ、漸次ニ築實シテ、藁薦ノ所ニ至レハ、更ニ水ヲ澆キ、土砂ヲ以テ、其ノ上ヲ塗ルコト、厚サ

第十八圖



凡四五寸、其ノ状恰亀甲ノ如シ、次キニ細柴ヲ積ミテ、亀甲上ヲ灸キ、而シテ窯口ヲ作クルナリ、窯口ハ、横一尺、縦一尺二三寸トス、先ツ窯前ノ土ヲ穿ツコト、深サ一尺余、圍ミ凡三尺、而シテ窯口ヲ開クコト寸法ノ如シ、次キニ窯内ノ薪材及ヒ細

柴ヲ出タシ、更ニ土砂ヲ以テ窯口ヲ塗リ、次キニ烟筒ヲ作クルナリ、烟筒ハ、長サ三尺、周圍一尺五寸、下邊ハ、二尺トス、コレヲ作クルノ法ハ、先ツ窯後ニ就キ、一小孔ヲ穿ツベシ、小孔ハ、即烟氣ノ通スル所ナリ、コレヲ穿ツニハ、地平ヨリ小棍ヲ窯内ニ穿入セシメ、而シテ小棍ノ端ヲ中心トナシ、束薪ヲ直立セシメ、土砂ヲ以テコレヲ塗リ、筒状ヲ作クルナリ、土砂乾ケハ、則筒内ノ薪材ヲ取り、又窯内ニ入リテ曩ニ穿入セシメタル小棍ヲ抜クナリ、此ニ於キテ土窯全ク成ル、即第十九圖ノ

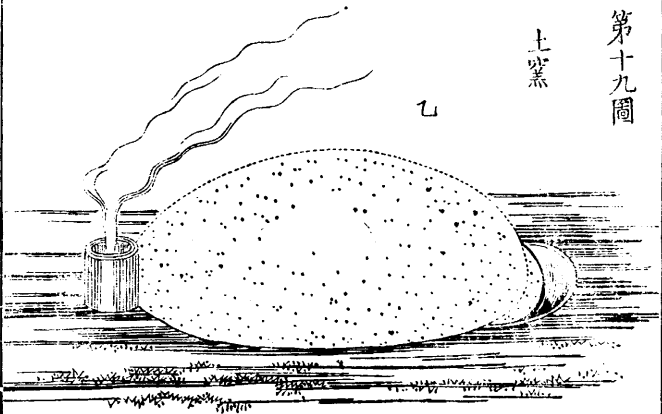
如シ、凡炭窯ノ製造ハ、大略此ノ如シト雖、始メテ製造スル者ハ、宜シク專業者ニ就キテ、詳ニ聞クヘシ、古來文字上ノ事、多クハ實際ニ施シ難ケレハナリ、

○燒炭說

硬炭ヲ燒クノ法ハ、先ツ藤蔓或ハ藁索ヲ以テ、炭材ヲ結束シ、一人ハ、コレヲ窯傍ニ運搬シ、一人ハ、雉子股ノ前ニ在リテ、コレヲ窯内ニ投入シ、火_カヲ以テ順次ニ累積シ、而シテ梢柴ヲ投入シ、火_カヲ燃ヤスナリ、其ノ火焰ノ發スル、始メハ色黒クシ

第十九圖

土窯



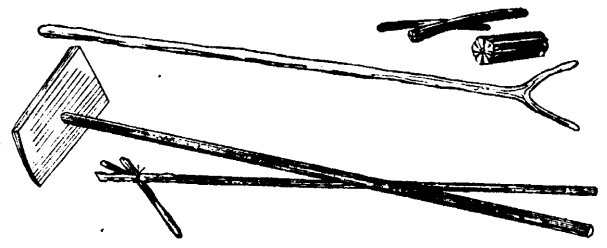
テ後ニ稍淡ナリ、此ニ於キテ土砂ヲ以テ窯口ヲ塞キ、小孔ヲ下邊ニ穿ツナリ、小孔ハ、経凡三四寸コレヲ口塗ト云フ、而シテ煙色變シテ白色トナリ、又淺色トナル、此ニ於キテ土砂ヲ以テ、窯口ノ全面ヲ塞キ、又烟筒ヲ塞キ空氣ノ通路ヲ絶チ、暫

シテ窯口ヲ開ケハ、窯内ノ炭材皆炭化セリ、此ニ於キテエブリマヘガキ等ノ器械ヲ以テ、炭ヲ窯前ニ出タシ、ゴハイヲ以テ火ヲ消スナリ、ゴハイハ、炭末ヲ土砂ニ和シ、水ヲ澆キタルモノナリ、而シテ窯内ノ火氣全ク消セサル時、更ニ炭材ヲ投入シ、燒クコト前ノ如シ、凡一窯ヲ燒クノ時間ハ、一晝夜トス、其ノ量目ハ、窯ノ大小ニヨリテ各異ナレトモ、大抵櫛櫛ハ一窯三十五貫目、松ハ、三十貫目トス、又土窯炭ヲ燒クノ法ハ、火叉ヲ以テ炭材ヲ窯内ニ累積シ、梢柴ヲ投入シ、火ヲ燃ヤシ、煙

色ヲ察シ、土砂ヲ以テ先ツ窯口十分ノ三ヲ塞キ、後又烟色ヲ察シ、十分ノ七ヲ塞キ、後遂ニ窯口ノ全面ヲ塞キ、又煙筒ヲ塞キ、空氣ヲシテ全ク通セシメス、暫シテ窯口ヲ開ケハ、炭材皆炭化セリ、此ニ於キテエブリマヘガキ等ヲ以テ、炭ヲ窯前ニ出タシ、ゴハイヲ以テ火ヲ消スコト、硬炭ニ同シ、而シテ窯内ノ火氣猶存スル時、更ニ炭材ヲ投入シ、燒クコト前ノ如シ、一窯ヲ燒クノ時間ハ、石窯ニ同シ、唯櫛炭即佐倉炭ハ、五日ニシテ僅ニ二窯ヲ燒クヘシ、コレ窯内ノ炭全ク燒キ盡クシテ、後一日

第二十圖

製炭器具



ヲ過キ窯口ヲ開キコレヲ出タシ更ニ炭材ヲ入レ、火ヲ燃ヤスヲ以テ、其ノ時間他窯ヨリ後ル、ナリ、凡炭窯ハ、古キヲ尊フ、新シキモノハ、炭量ヲ減スルコト多シ、又燒炭ノ巧拙ハ、烟色ヲ察スルト、窯口ヲ塞クノ作業ニ在リ、學者宜シク實地ニ

就キテ、研究スベシ、

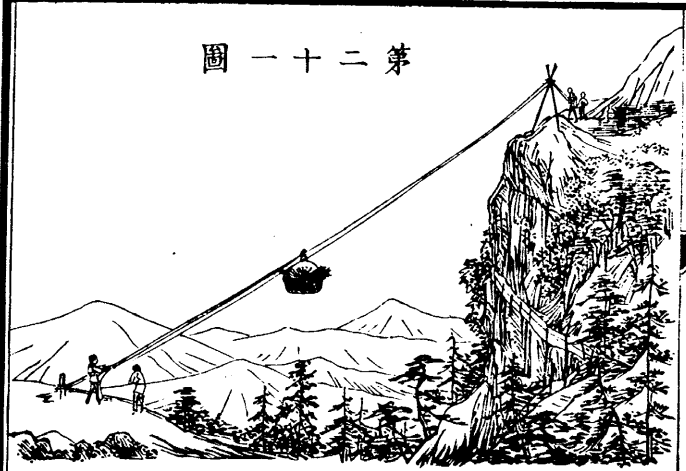
○收益説

凡櫟、楡、檜ノ林ハ、十年ニシテ始メテ益ヲ收メ、自後五年毎ニ、益ヲ收ムルコト四五回ニ至ルナリ、今試ニ一町歩ノ收益ヲ概算セシ、林樹十年ニシテ周圍六七寸、木數凡二千本トナル、コレヲ伐リテ薪炭トスレハ、其ノ價金四十圓ヲ得ベシ、明治十三年十一月、下總邊薪五十七貫五百目、炭十一貫五百目、金壹圓ヲ價ス、今此ノ價ニ據リテ、概算シ、木數二千本、金、後五年ニシテ根砧發生ノ小蘗、長シテ其ノ周圍六七寸ニ至ル、即木數六千本ナリ、コ

レヲ伐リテ薪炭トスレハ、其ノ價金百二十圓ヲ得ヘシ、自後五年毎ノ收益コレニ同シ、三十年ニシテ、其ノ收益ノ總計ハ、金四百八十圓ナリ、中就キ植樹ノ諸費百圓ヲ除キ、三百八十圓ノ益ヲ得ヘシ、而シテ地價地租ハ、毎年洗伐スル所ノ薪材ヲ賣リテ、以テ償フコトヲ得ヘシ、十町百町皆此ノ例ニ從フヘシ、又松樹ハ、三樹ト異ナリ、生長最速シト雖、一旦コレヲ伐レハ、更ニ植樹ヲナシ、十余年ヲ経ルニアラサレハ、以テ薪炭トナシ難シ、故ニ其ノ收益ハ、始メハ多シト雖、三十年ヲ平

均スレハ、大ニ三樹ニ劣レルナリ、此ヲ以テ薪炭林ハ、三樹ヲ樹ツルヲ宜シトス、然レトモ海岸砂深クシテ、三樹ヲ樹ツルコト能ハサル地ノ如キハ、宜シク松ヲ樹ツヘシ、松ハ、命根深ク土中ニ鑽入シテ、暴風怒濤ノ為メニ仆ル、ノ患、少ナキナリ、凡薪ト炭トノ利益ハ、大差ナシ、唯運搬ノ便不便ヲ以テ差ヲ生スルノミ、概スルニ運搬便利ノ地ニ於キテハ、薪ニシテ出タスヲ可トシ、不便ノ地ニ於キテハ、炭ニシテ出タスヲ可トス、然レトモ材木ト同シク自都會ニ運搬スレハ、或ハ奸商

第一一圖



ニ欺カル、ノ懼アリ、商
業ニ熟セサルモノハ、宜
シク專業者ニ托シ、林中
ニ於キテ販賣スベシ、

○薪炭雜說

上卷材木専用ノ林ヲ
斫伐スル方法ヲ説キ、
而シテ其ノ梢頭枝條
ヲ以テ、薪炭トナスコ
トニ及ホサス、故ニ此

ノ一説ヲ作りテ、以テ此ノ書ノ終ハリトナス、
凡林中所在ノ樹木ハ、針葉、闊葉ノ別ナク、皆伐リ
テ以テ薪炭トナスヘキナリ、中ニ就キ樺、榿、樺、及
ヒ楸、椴、松等ノ如キハ、最良ノ燃料タリ、山間ノ人
民ハ、常ニ是等ノ燃料ニ富メルヲ以テ、濫ニコレ
ヲ用キテ、嘗顧ミサルカ如シ、抑山林宏濶ナリト
雖樹木ハ、限リアリ、需用ハ、限リナシ、限リアルノ
樹木ヲ以テ、限リナキノ需用ニ供セントス、其ノ
終ニ欠乏ニ至ルコト、識者ヲ俟タスシテ、知ルヘ
キナリ、カノ飛驒、信濃ノ如キ、従来山林多クシテ

頗燃料ニ富ミシカ、現今漸欠乏シテ、其ノ價甚貴
キニ至レリ、是レ他ナシ濫ニ用キテ顧ミサルノ
致ス所ナリ、山間ノ人民以テ鑿ミルヘシ、カノ材
木ヲ主トシテ、樹テタル林ニ於キテ、或ハ洗伐ヲ
行ヒ、或ハ斫伐ヲ行フ時ノ如キハ、先ツ材木ヲ採
收シ、次キニ梢頭及ヒ枝條ヲ鋸斷シ、其ノ大ナル
者ハ、薪トナシ、小ナル者ハ、柴トナシ、一枝一葉ト
雖、皆收メテ漏スコトナカレ、然レトモ山間ハ、頗
運搬ニ苦ム、凡運搬ハ、水陸二道各其ノ便ニ就ク
ベシト雖、薪材ノ運搬ハ、陸運ヲ可トス、人力ヲ勞

スルコト極メテ多シト雖、燃カヲ減スルノ患、少
ナケレハナリ、西國ノ人、一器械ヲ製シテ、薪炭ヲ
運搬ス、頗輕便ナリ、其ノ製、巨木ヲ山ノ東西ニ立
テ、大繩ヲ亘シ、薪材ヲ畚ニ盛リ、畚底ニ細繩ヲ
約シ、東西ノ人、相汲引シテ、運輸スルナリ、即第廿
一圖ノ如シ、モシ夫陸運ヲ行フコト能ハサル所
ハ、水運ヲ行フヘシ、水運ハ、溪流急ニシテ水量多
キ所ヲ可トス、三四十里ノ遠キニ運スヘシ、溪流
急ナリト雖、水量少ナケレハ、十里ノ外ニ運スヘ
カラス、材質ヲ損シ、燃カヲ減シ、材料ヲ失フコト

多ケレハナリ、モシ夫、水陸兩運共ニ不便ノ地ハ、
薪材ヲ燒キテ炭トナシ、重量ヲ減セシメテ以テ
運スヘシ、燒炭ノ法ハ、大抵前條ニ詳ナリト雖、山
間ニ於キテ行フ所ノ法ハ、宜シク簡易ヲ旨トス
ベシ、

初學山林書卷下畢

明治十四年二月廿一日版權免許

明治十四年三月八日刻成

定價拾錢

著述并出版人

静岡縣士族

飯島半十郎

東京北豐島郡金杉村
百六拾八番地

出版人

東京府平民

福田仙藏

東京神田區通新石町
貳拾壹番地

110.11-1

飯島半十郎著

泥炭考

近刻

一冊

此ノ書ハ、泥炭ヲ採收シテ薪炭ニ代用セシ
 ムル事、古來我國泥炭ヲ用キ來リシ各地方
 ノ事、歐米諸國ノ採收法及ヒ利益ノ多寡等
 ヲ記載セシモノナリ、現今薪炭欠乏ノ各地
 方ニ於キテハ、宜シク此ノ書ヲ閱シ、泥炭ヲ
 採リ以テ其ノ欠乏ヲ補フベシ、